

# 『学び合い』を通じた教師の見取りと業務改善の意識における 教育環境に関する考察

－学校組織，校務分掌とその機能の改善－

大坪 宏 至\*・西川 純\*\*  
(平成30年8月21日受付；平成30年11月19日受理)

## 要 旨

本研究は、良い教育環境とは何か、教師の見取りと業務改善の意識に焦点を当て、『学び合い』の考えを持って教育活動に取り組んでいる者（以下、『学び合い』授業実践者とする）と、そうでない者（以下、『学び合い』以外の授業実践者とする）とを比較して、見取り及び業務改善の意識に違いがあるのか、見取りではインターベンションによる教師の見取りの分類を利用して、業務改善の意識では校務分掌を視点において分析し、検証した。その結果、見取りでは、『学び合い』授業実践者は学習集団のコミュニケーション状況の理解に優れ、『学び合い』以外の授業実践者は学習者一人一人の学習状況を把握することに優れていることが明らかとなった。また業務改善では目指している方向性に違いはないことが明らかとなった。

## KEY WORDS

『学び合い』，見取り，業務改善，教育環境

## 1 問題の所在

文部科学省は、中央教育審議会「論点整理」（2015）において、2030年の社会とその先の社会に生きる子どもに必要な育成すべき資質・能力の要素として、「知識に関するもの」「スキルに関するもの」「情意（人間性など）に関するもの」の3つに大きく分類されることを述べられた。また、この分類された3つを具体的に考え、「知識に関するもの」については、「何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）」として、「スキルに関するもの」については、「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）」として、「情意（人間性など）に関するもの」については、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力，人間性等）」として分類しており、これをまとめて「三つの柱」として捉えている。そして、この「個別の知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力，人間性等」は、「三つの柱」として、各教科等の文脈の中で身に付けていく力と教科横断的に身に付けていく力を相互に関連付けながら育成していく必要があると述べている。<sup>(1)</sup>

このような資質・能力を育成する具体的な改善方策の1つとして、「アクティブ・ラーニング」が取り上げられた。この「アクティブ・ラーニング」という言葉は、中央教育審議会（2012）において、「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」と定義されている。<sup>(2)</sup>

西川純（2010）は、アクティブ・ラーニングの1つとして『学び合い』を提唱している。『学び合い』とは、「一人も見捨てないという一貫した願い」のもと、「学校は、多様な人と折り合いをつけて自らの課題を達成する経験を通して、その有効性を実感し、より多くの人がある自分の同僚であることを学ぶ場」であるという学校観と、「子どもたちは有能である」という子ども観、そして「教師の仕事は、目標の設定、評価、環境の整備で、教授（子どもから見れば学習）は子どもに任せるべきだ」という授業観、の3つの考えから『学び合い』の授業は導かれると述べている。<sup>(3)</sup>

また、文部科学省は、中央教育審議会「論点整理」（2015）において、学修評価の重要性についても述べている。これは、学校教育法が規定する三要素、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」を踏まえて整理していく必要があるということ。そして評価に当たっての留意点等で、現在の「関心・意欲・態

\*静岡市立清水興津中学校 \*\*学校教育系

度」の評価に関しては、例えば、正しいノートの取り方や挙手の回数をもって評価するなど、より主体的な学びの過程の実現に向かっていくかどうかという観点から、学習内容に対する子供たちの関心・意欲・態度等を見取り、評価していくことが必要であると述べている。<sup>(4)</sup>

つまり、教師の見取りが重要になってくる。この見取りについて、松友（2015）は、学習者の主体的で協働的な学習を生み出すためには、教師の意図的かつ効果的な介入（インターベンション）が必要であると述べ、インターベンションの基本類型から教師の見取りの類型と基盤となる情報を図にまとめた。<sup>(5)</sup>

2016年8月、第3次安倍第2次改造内閣の発足とともに、一億総活躍社会実現のために働き方改革担当大臣を設置し、翌月内閣総理大臣決裁で「働き方改革実現会議」を設置した。この目的は、人口減少による労働力不足解消で主に民間勤労者を中心にした審議であった。<sup>(6)</sup>しかし2017年4月、文部科学省は「教員勤務実態調査（平成28年度）の集計（速報値）」を公表し、過労死ラインの1ヵ月当たりの時間外労働時間の割合の多さや2006年調査と比較して勤務時間が増えている<sup>(7)</sup>ことから、2017年6月、中央教育審議会に松野文部科学大臣（当時）が、「看過できない深刻な状況である」と受け止め、「学校が担うべき業務の在り方」について検討するように諮問した。<sup>(8)</sup>更に、2017年8月、中央教育審議会が「緊急提言」として、教育に携わる全ての関係者が、「勤務時間」「業務改善」「勤務環境整備」の点で強い意識を持って、それぞれの立場から取り組みを実行し、教職員がその効果を実感できるようにまとめた。<sup>(9)</sup>この背景には、2017年7月、文部科学省が公表した「平成29年度教育委員会における学校の業務改善のための取組状況調査結果」において、取り組みが十分に行われていないことが明らかになった<sup>(10)</sup>ことが大きい。

しかし、業務であるべき校務の分類について、法的に明確に定めているものはなく、整理しにくい。<sup>(11)</sup>先行研究を調べてみても、その視点から校務分掌について述べているものが見当たらない。そのため、業務改善について校務の分類から始め、教員の意識を基に見直していく必要がある。また、西川純（2016）の提唱する『学び合い』の学校観において、「多様な人と折り合いをつける」大切さが述べられている。<sup>(12)</sup>学校運営においても、「多様な人と折り合いをつける」考えは業務改善の意識にも影響することが分かる。

そこで、良い教育環境には、教師の見取り向上と業務改善に大切なものは何か、明らかにしていきたい。

## 2 研究目的

『学び合い』の考えを持って授業実践に取り組んでいる者と、そうでない者とを比較して、どの程度の見取り、及び業務改善の意識に違いがあるのか、見取りではインターベンションによる教師の見取りの分類を利用して、業務改善の意識では校務分掌を視点において、事例的研究として明らかにし、良い教育環境には何が大切かを導き出すことである。

## 3 研究方法

### 3.1 調査対象

見取り及び業務改善の意識調査それぞれの調査対象は、それぞれ小・中学校教員84名小・中・高等学校教員71名である。

### 3.2 調査期間

見取り及び業務改善の意識調査それぞれの調査期間は、見取りが2016年11月から12月、業務改善は2017年11月から12月である。

### 3.3 調査方法

見取りの意識調査方法は、松友（2015）の教師の見取りの類型に基づいて調査を行った。業務改善の意識調査方法は、中央教育審議会（2017）「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」における、教員の業務の分類（例）に基づいて調査を行った。<sup>(13)</sup>また、校務分掌名を回答するにあたり、参考として、文部科学省（2015）「学校現場における業務改善のためのガイドライン～子供と向き合う時間の確保を目指して～」の児童生徒の指導に関する業務41項目、学校の運営に関する業務30項目を補足した。<sup>(14)</sup>

・アンケート調査を行った。

(質問内容は、見取りについては表1-1と表1-2、業務改善の意識については表2-1と表2-2に示す)  
・許可をいただいた教員には、インタビューを行った。

表1-1 見取り調査質問内容

見取りの対象	見取りの視座	質問内容
学習者個人	分析的	学習者(児童・生徒)一人一人の反応や変容を理解している
	長期的	学習者(児童・生徒)一人一人が、今後必要になる能力を伸ばす取り組みを考えている
	内面的	学習者(児童・生徒)一人一人のこれまでの学習状況を把握している
学習集団	分析的	学習集団のコミュニケーション状況を理解している
	長期的	学習集団作りを意識して、的確な指示等の取り組みをしている
授業展開	分析的	学習者(児童・生徒)個々の学習速度や授業時間等、授業展開を把握している

## 【「見取り」に関する調査】

6つの質問項目にお答えください。

一回の授業における意識割合を、100～0(%)の数字で、あなたの行っている授業実践の回答欄に記入してください。

『学び合い』授業実践とそれ以外の授業実践の両方を行っている方は、両方記入してください。

(学習者個人分析的見取り)

- (1) 学習者(児童・生徒)一人一人の反応や変容を理解している。

『学び合い』授業実践	左記以外授業実践
<input type="text"/> %	<input type="text"/> %

(学習者個人長期的見取り)

- (2) 学習者(児童・生徒)一人一人が、今後必要になる能力を伸ばす取り組みを考えている。

『学び合い』授業実践	左記以外授業実践
<input type="text"/> %	<input type="text"/> %

(学習者個人内面的見取り)

- (3) 学習者(児童・生徒)一人一人のこれまでの学習状況を把握している。

『学び合い』授業実践	左記以外授業実践
<input type="text"/> %	<input type="text"/> %

(学習集団分析的見取り)

- (4) 学習集団のコミュニケーション状況を理解している。

『学び合い』授業実践	左記以外授業実践
<input type="text"/> %	<input type="text"/> %

(学習集団長期的見取り)

- (5) 学習集団作りを意識して、的確な指示等の取り組みをしている。

『学び合い』授業実践	左記以外授業実践
<input type="text"/> %	<input type="text"/> %

(授業展開分析的見取り)

- (6) 学習者(児童・生徒)個々の学習速度や授業時間等、授業展開を把握している。

『学び合い』授業実践	左記以外授業実践
<input type="text"/> %	<input type="text"/> %

図1 見取り調査アンケート用紙

表 2 業務改善の意識調査質問内容

番	分類	質問内容
1	校務分掌	貴校の校務分掌数は多いと感じますか（4段階選択）
2		以下の観点において、あなたが必要だと思う校務分掌名（業務）を5つ挙げてください ア 教員が行うことが期待されている本来の校務分掌名（業務）
3		イ 教員に加え、専門スタッフ、地域人材等が連携・分担することで、より効果を上げることができる校務分掌名（業務）
4		ウ 教員以外の職員が連携・分担することが効果的な校務分掌名（業務）
5	学校業務	貴校の業務改善は、年々良くなっていると感じますか（4段階選択）
6		業務改善に必要な要素は何か、あなたが考えていることを3つ挙げてください

I. 「校務分掌」について質問します。

a. 貴校の校務分掌数は多いと感じますか。 ※該当する数字に○で囲んでください。  
1. とても感じる 2. 少し感じる 3. あまり感じない 4. とても感じない

b. 以下の観点において、あなたが必要だと思う校務分掌名（業務）を5つ挙げてください。  
※5つ未満でも構いません。  
校務分掌図が樹形（系統）化してあれば、末端のものをできる限り記入をお願いします。

ア. 教員が行うことが期待されている本来の校務分掌名（業務）

--	--	--	--

イ. 教員に加え、専門スタッフ、地域人材等が連携・分担することで、より効果を上げることができる校務分掌名（業務）

--	--	--	--

ウ. 教員以外の職員が連携・分担することが効果的な校務分掌名（業務）

--	--	--	--

II. 「学校業務」について質問します。

a-1. 貴校の業務改善は、年々良くなっていると感じますか。  
(今年度から赴任の方は、前年度までの学校で考えてください。)  
※該当する数字に○で囲んでください。  
1. とても感じる 2. 少し感じる 3. あまり感じない 4. とても感じない

a-2. そのように感じる理由を教えてください。

--

b. 業務改善に必要な要素は何か、あなたが考えていることを3つ挙げてください。また、その理由も教えてください。  
※3つ未満でも構いません。

要素A	
理由	
要素B	
理由	
要素C	
理由	

図 2 業務改善の意識調査アンケート用紙

### 3. 4 分析方法

- ・アンケート結果をクロス集計し、回答の違いがどのように影響を与えているかを分析する。
- ・インタビュー内容をプロトコル分析し、意識の違いがどこにあるのかを分析する。

## 4 結果・考察

### 4. 1 見取り調査結果

松友（2015）による教師の見取りの種類と基盤となる情報の表を基に『学び合い』授業実践者とそうでない者とを比較した結果が、表3である。

『学び合い』授業実践者は、学習集団分析的見取り項目である、学習者のコミュニケーション状況理解が80.9%と一番高く、次いで学習者個人長期的見取り項目である、学習者一人一人が、今後必要になる能力を伸ばす取り組みを考えるが78.2%であった。また項目間の意識割合の最大差は19.1であった。

『学び合い』以外授業実践者は、授業展開分析的見取り項目である、学習者個々の学習速度や授業時間等、授業展開を把握しているが71.4%と一番高く、次いで学習集団長期的見取りである、学習集団作りを意識して、的確な指示等の取り組みをしているが69.5%であった。また項目間の意識割合の最大差は15.9であった。

また、分散分析法で有意性を見た結果、学習者個人内面的見取りと授業展開分析的見取りが、有意水準1%未満で有意性を示し、学習者個人長期的見取りと学習集団分析的見取りが、有意水準5%未満で有意性を示し、残る2つは有意性を示さなかった。

表3 見取りの意識割合（平均値）

分類	質問内容	『学び合い』 授業実践者 (44人)	『学び合い』 以外授業実践者 (72人)	分散分析 F比	有意差
学習者個人 分析的見取り	学習者一人一人の反応や変容を理解している	72.7%	68.6%	0.42	なし
学習者個人 長期的見取り	学習者一人一人が、今後必要になる能力を伸ばす取り組みを考えている	78.2%	55.5%	5.52	5%未満 有意
学習者個人 内面的見取り	学習者一人一人のこれまでの学習状況を把握している	61.8%	66.4%	10.24	1%未満 有意
学習集団 分析的見取り	学習集団のコミュニケーション状況を理解している	80.9%	63.6%	6.62	5%未満 有意
学習集団 長期的見取り	学習集団作りを意識して、的確な指示等の取り組みをしている	73.6%	69.5%	0.03	なし
授業展開 分析的見取り	学習者個々の学習速度や授業時間等、授業展開を把握している	61.8%	71.4%	11.19	1%未満 有意

### 4. 2 業務改善の意識調査結果

校務分掌数についての意識調査の結果は、表4-1である。

『学び合い』授業実践者は、校務分掌数は多いとあまり感じない人の割合が41.9%（13人）と高いが、全体的に多いと感じる人の割合が58.1%（18人）と上回っている。『学び合い』以外授業実践者は、校務分掌数は多いとあまり感じない人の割合が52.6%（20人）と高かった。

また、校務分掌数は多いと感じるか感じないかを『学び合い』授業実践者と『学び合い』以外授業実践者とをカイ二乗検定で検定した結果、有意性は示されなかった。（表4-2）

表4-1 I-1 貴校の校務分掌数は多いと感じますか

番	分類	『学び合い』授業実践者 (31人)	『学び合い』以外授業実践者 (38人)
1	とても感じる	7人 (22.6%)	5人 (13.2%)
2	少し感じる	11人 (35.5%)	13人 (34.2%)
3	あまり感じない	13人 (41.9%)	20人 (52.6%)
4	とても感じない	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)

表4-2 表4-1を「感じる」、「感じない」の2項目にしてカイ二乗検定で検定した結果

番	分類	『学び合い』授業実践者 (31人)	『学び合い』以外授業実践者 (38人)	偶然確率 p	有意性
1	感じる	18人 (58.1%)	18人 (47.4%)	0.413	なし
2	感じない	13人 (41.9%)	20人 (52.6%)		

そして、3つの観点で必要だと思う校務分掌を5つ挙げてもらう調査の結果は、表5-1、表6-1、表7-1となった。その観点としては、教員が行うことが期待されている本来的な校務分掌（表5-1）、教員に加え、専門スタッフ、地域人材等が連携・分担することで、より効果を上げることができる校務分掌（表6-1）、教員以外の職員が連携・分担することが効果的な校務分掌（表7-1）である。

自由記述であったため、内容が多岐に渡ったため、参考資料として載せた文部科学省の調査で使用した71項目をさらに分野ごとにまとめ、回答数が全体の10%以上の項目について整理した。

教員が行うことが期待されている本来的な校務分掌名（業務）上位回答の結果は、表5-1である。

『学び合い』授業実践者では、教材研究・研修の項目が15.9%（21人）と一番高く、次いで生徒指導の項目が9.1%（12人）であった。『学び合い』以外授業実践者では、教材研究・研修、生活指導の項目が10.9%（17人）と一番高いが、教務の項目2.6%（4人）以外のその他の上位回答と差がほぼなかった。

また、それぞれの項目をカイ二乗検定で検定したところ、生活指導と特別活動指導が有意5%未満で有意性が示された。（表5-2）

表5-1 I-2-1 教員が行うことが期待されている本来的な校務分掌名（業務）上位回答

番	校務分掌名 (業務)	『学び合い』授業実践者 (132人)	『学び合い』以外授業実践者 (156人)
1	教材研究・研修	21人 (15.9%)	17人 (10.9%)
2	生活指導	5人 (3.8%)	17人 (10.9%)
3	生徒指導	12人 (9.1%)	9人 (5.8%)
4	進路指導	9人 (6.8%)	10人 (6.4%)
5	成績処理	9人 (6.8%)	9人 (5.8%)
6	学習指導	5人 (3.8%)	11人 (7.1%)
7	特別活動指導	1人 (0.8%)	11人 (7.1%)
8	教務	7人 (5.3%)	4人 (2.6%)

表5-2 表5-1のそれぞれの項目をカイ二乗検定で検定した結果

番	校務分掌名 (業務)	○X	『学び合い』授業実践者 (132人)	『学び合い』以外授業実践者 (156人)	偶然確率 p	有意性
1	教材研究・研修	○	21人 (15.9%)	17人 (10.9%)	1.161	なし
		X	111人 (84.1%)	139人 (89.1%)		
2	生活指導	○	5人 (3.8%)	17人 (10.9%)	4.164	5%未満 有意
		X	127人 (96.2%)	139人 (89.1%)		
3	生徒指導	○	12人 (9.1%)	9人 (5.8%)	0.727	なし
		X	120人 (90.9%)	147人 (94.2%)		
4	進路指導	○	9人 (6.8%)	10人 (6.4%)	0.010	なし
		X	123人 (93.2%)	146人 (93.6%)		
5	成績処理	○	9人 (6.8%)	9人 (5.8%)	0.015	なし
		X	123人 (93.2%)	147人 (94.2%)		
6	学習指導	○	5人 (3.8%)	11人 (7.1%)	0.896	なし
		X	127人 (96.2%)	145人 (92.9%)		
7	特別活動指導	○	1人 (0.8%)	11人 (7.1%)	5.604	5%未満 有意
		X	131人 (99.2%)	145人 (92.9%)		
8	教務	○	7人 (5.3%)	4人 (2.6%)	0.810	なし
		X	125人 (94.7%)	152人 (97.4%)		

教員に加え、専門スタッフ、地域人材等が連携・分担することで、より効果を上げることができる校務分掌名（業務）上位回答の結果は、表6-1である。

『学び合い』授業実践者では、部活動の項目が9.5%（11人）と一番高く、次いで進路指導の項目が7.8%（9人）であった。教育相談の項目は、0.9%（1人）と極端に低かった。『学び合い』以外授業実践者では、部活動の項目が13.8%（20人）と一番高く、次いでPTA・地域連携、教育相談の項目が6.2%（9人）であった。

また、それぞれの項目をカイ二乗検定で検定したところ、教育相談が有意10%未満で有意性が示された。（表6-2）

表6-1 I-2-2 教員に加え、専門スタッフ、地域人材等が連携・分担することで、より効果を上げることができる校務分掌名（業務）上位回答

番	校務分掌名 （業務）	『学び合い』授業実践者 （116人）	『学び合い』以外授業実践者 （145人）
1	部活動	11人（9.5%）	20人（13.8%）
2	PTA・地域連携	7人（6.0%）	9人（6.2%）
3	特別支援	8人（6.9%）	5人（3.4%）
4	進路指導	9人（7.8%）	5人（3.4%）
5	登下校指導	4人（3.4%）	6人（4.1%）
6	教育相談	1人（0.9%）	9人（6.2%）

表6-2 表6-1のそれぞれの項目をカイ二乗検定で検定した結果

番	校務分掌名 （業務）	○X	『学び合い』 授業実践者 （116人）	『学び合い』 以外授業実践者 （145人）	偶然確率 p	有意性
1	部活動	○	11人（9.5%）	20人（13.8%）	0.769	なし
		X	105人（90.5%）	125人（86.2%）		
2	PTA ・地域連携	○	7人（6.0%）	9人（6.2%）	0.041	なし
		X	109人（94.0%）	136人（93.8%）		
3	特別支援	○	8人（6.9%）	5人（3.4%）	0.972	なし
		X	108人（93.1%）	140人（96.6%）		
4	進路指導	○	9人（7.8%）	5人（3.4%）	1.586	なし
		X	107人（92.2%）	140人（96.6%）		
5	登下校指導	○	4人（3.4%）	6人（4.1%）	0.001	なし
		X	112人（96.6%）	139人（95.9%）		
6	教育相談	○	1人（0.9%）	9人（6.2%）	3.651	10%未満 有意
		X	115人（99.1%）	136人（93.8%）		

教員以外の職員が連携・分担することが効果的な校務分掌名（業務）上位回答の結果は、表7-1である。

『学び合い』授業実践者では、部活動の項目が20.2%（17人）と一番高く、次いで給食の項目が10.7%（9人）であった。『学び合い』以外授業実践者では、会計の項目が16.2%（16人）と一番高く、次いで給食の項目が12.1%（12人）、部活動の項目が11.1%（11人）であった。

また、それぞれの項目をカイ二乗検定で検定したところ、会計が有意10%未満で有意性が示された。（表7-2）

表7-1 I-2-3 教員以外の職員が連携・分担することが効果的な校務分掌名（業務）上位回答

番	校務分掌名 （業務）	『学び合い』授業実践者 （95人）	『学び合い』以外授業実践者 （99人）
1	部活動	17人（20.2%）	11人（11.1%）
2	会計	6人（7.1%）	16人（16.2%）
3	給食	9人（10.7%）	12人（12.1%）
4	備品施設管理	3人（3.5%）	9人（9.1%）

表 7-2 表 7-1 のそれぞれの項目をカイ二乗検定で検定した結果

番	校務分掌名 (業務)	○X	『学び合い』 授業実践者 (95人)	『学び合い』 以外授業実践者 (99人)	偶然確率 p	有意性
1	部活動	○	17人 (20.2%)	11人 (11.1%)	1.299	なし
		X	78人 (79.8%)	88人 (88.9%)		
2	会計	○	6人 (7.1%)	16人 (16.2%)	3.746	10%未満 有意
		X	89人 (92.9%)	83人 (83.8%)		
3	給食	○	9人 (10.7%)	12人 (12.1%)	0.131	なし
		X	86人 (89.3%)	87人 (87.9%)		
4	備品施設管理	○	3人 (3.5%)	9人 (9.1%)	2.007	なし
		X	92人 (96.5%)	90人 (90.9%)		

業務改善の実感についての意識調査の結果は、表 8-1 である。

『学び合い』授業実践者では、業務改善は年々良くなっているとあまり感じない人の割合が54.8% (17人) と一番高く、全体的に感じない人の割合が67.7% (21人) であった。『学び合い』以外授業実践者では、業務改善は年々良くなっているとあまり感じない人の割合が36.8% (14人) と一番高く、全体的に感じない人の割合が57.9% (22人) であった。

また、貴校の業務改善は年々良くなっていると感じるか感じないかを『学び合い』授業実践者と『学び合い』以外授業実践者とをカイ二乗検定で検定した結果、有意性は示されなかった。(表 8-2)

表 8-1 II-1 貴校の業務改善は、年々良くなっていると感じますか

番	分類	『学び合い』授業実践者 (31人)	『学び合い』以外授業実践者 (38人)
1	とても感じる	3人 (9.7%)	5人 (13.2%)
2	少し感じる	7人 (22.6%)	11人 (28.9%)
3	あまり感じない	17人 (54.8%)	14人 (36.8%)
4	とても感じない	4人 (12.9%)	8人 (21.1%)

表 8-2 表 8-1 を「感じる」、「感じない」の2項目にしてカイ二乗検定で検定した結果

番	分類	『学び合い』授業実践者 (31人)	『学び合い』以外授業実践者 (38人)	偶然確率 p	有意性
1	感じる	10人 (32.3%)	16人 (42.1%)	0.348	なし
2	感じない	21人 (67.7%)	22人 (57.9%)		

そして業務改善に必要な要素は何か上位回答の結果は、表 9-1 である。

『学び合い』授業実践者では、人材活用、部活動の項目が13.2% (9人) と一番高く、次いで意識改革の項目が10.3% (7人) であった。『学び合い』以外授業実践者では、人員増の項目が18.7% (14人) と一番高く、次いでスクラップ・業務精選が17.3% (13人) であった。

また、また、それぞれの項目をカイ二乗検定で検定したところ、人員増が有意5%未満で、部活動が有意10%未満で有意性が示された。(表 9-2)

表 9-1 II-2 業務改善に必要な要素は何か 上位回答

番	校務分掌名 (業務)	『学び合い』授業実践者 (68人)	『学び合い』以外授業実践者 (75人)
1	人員増	4人 (5.9%)	14人 (18.7%)
2	スクラップ・業務精選	5人 (7.4%)	13人 (17.3%)
3	人材活用	9人 (13.2%)	7人 (9.3%)
4	部活動	9人 (13.2%)	3人 (0.4%)
5	意識改革	7人 (10.3%)	5人 (6.7%)

表9-2 表9-1のそれぞれの項目をカイ二乗検定で検定した結果

番	校務分掌名 (業務)	○X	『学び合い』 授業実践者 (68人)	『学び合い』 以外授業実践者 (75人)	偶然確率 p	有意性
1	人員増	○	4人 (5.9%)	14人 (18.7%)	4.199	5%未満 有意
		X	64人 (94.1%)	61人 (81.3%)		
2	スクラップ ・業務精選	○	5人 (7.4%)	13人 (17.3%)	2.385	なし
		X	63人 (92.6%)	62人 (82.7%)		
3	人材活用	○	9人 (13.2%)	7人 (9.3%)	0.224	なし
		X	59人 (86.8%)	68人 (90.7%)		
4	部活動	○	9人 (13.2%)	3人 (0.4%)	2.847	10%未満 有意
		X	59人 (86.8%)	72人 (99.6%)		
5	意識改革	○	7人 (10.3%)	5人 (6.7%)	0.230	なし
		X	61人 (89.7%)	70人 (93.3%)		

#### 4.3 考察

見取りの意識調査では、表3で示すように『学び合い』授業実践者は、長期的・分析的観点における見取りの自己評価の平均が70%以上となった。『学び合い』以外授業実践者は、授業展開の分析的見取りが70%以上となった。今回の調査では、数値の基準はなく、回答者の基準で委ねていた。そのため、有意性が示されたものもあれば、そうでないものもあるが、有意性を示された項目で考えると以下のことが明らかになった。

- ・『学び合い』授業実践者は、学習集団分析的見取りと学習者個人長期的見取りに優れているが、学習者個人内面的見取りと授業展開分析的見取りが比較的苦手意識がある。
- ・『学び合い』以外授業実践者は、授業展開分析的見取りに優れているが、学習者集団分析的見取りと学習者個人長期的見取りが比較的苦手意識がある。

また、観点の強みだけに焦点を当てると以下のことが明らかである。

- ・『学び合い』授業実践者は、学習集団の分析的見取りに強く、学習集団のコミュニケーション状況を理解することに優れている。
- ・『学び合い』以外授業実践者は、授業展開分析的見取りに強く、学習者個々の学習速度や授業時間等、授業展開を把握することに優れている。

業務改善の意識調査では、表4-1と表4-2で示すように『学び合い』授業実践者の58.1%は、校務分掌数は多いと感じているが、『学び合い』以外授業実践者の52.6%は、多いと感じていない結果であった。この質問も基準は回答者に委ねているため、多いか少ないかの判断は、回答者の全体把握がどの程度であるかによって変わると考えられる。しかし、多いと強く感じる割合が、『学び合い』授業実践者は22.6%、『学び合い』以外授業実践者は13.2%と差があるため、以下のことが明らかである。ただし、有意性は示されていないため今回の調査では一般性は保たれていないと考えられる。

- ・『学び合い』授業実践者は、校務分掌数は多いと感じている。
- ・『学び合い』以外授業実践者は、校務分掌数は多いと感じていない。

教員が行うことが期待されている本来の校務分掌名(業務)では、表5-1と表5-2で示すように以下のことが明らかである。ただし有意性が示されているのは、生活指導と特別活動指導のため、それ以外は一般性は保たれていないと考えられる。

- ・『学び合い』授業実践者は、教材研究・研修であると考えている。
- ・『学び合い』以外授業実践者は、教材研究・研修、生活指導、進路指導、特別活動指導であると考えている。

教員に加え、専門スタッフ、地域人材等が連携・分担することで、より効果を上げることができる校務分掌名(業務)では、表6-1と表6-2で示すように以下のことが明らかである。ただし有意性が示されているのは、教育相談のため、それ以外は一般性は保たれていないと考えられる。

- ・『学び合い』授業実践者も『学び合い』以外授業実践者も、部活動であると考えている。

教員以外の職員が連携・分担することが効果的な校務分掌名(業務)では、表7-1と表7-2で示すように以下のことが明らかである。ただし有意性が示されているのは、会計のため、それ以外は一般性が保たれていないと考えられる。

- ・『学び合い』授業実践者は、部活動、次いで給食であると考えている。
- ・『学び合い』以外授業実践者は、会計、次いで給食、部活動であると考えている。

貴校の業務改善は、年々良くなっていると感じるかは、表8-1と表8-2で示すように以下のことが明らかである。ただし有意性が示されていないため、一般性は保たれていないと考えられる。

- ・『学び合い』授業実践者も『学び合い』以外授業実践者も、年々良くなっているとは感じていない。

業務改善に必要な要素は何かは、表9-1と表9-2で示すように以下のことが明らかである。ただし有意性が示されているのは、人員増と部活動であるため、それ以外は一般性は保たれていないと考えられる。

- ・『学び合い』授業実践者は、人材活用、部活動、次いで意識改革であると考えている。
- ・『学び合い』以外授業実践者は、人員増、次いでスクラップ・業務精選であると考えている。

以上、明らかになったことを全体的に見ていくと、見取りの基準がなくても、『学び合い』授業実践者は、多様な人と折り合いをつけながら自らの課題を達成していくため、お互いにチェックすることで基準ができ、不得手な部分をより厳しくみることで数値に差が現れたと考えられる。『学び合い』授業実践者は、学習集団のコミュニケーション状況を理解することに優れているし、『学び合い』以外授業実践者は、授業展開を把握することに優れている。このお互いの良い部分を取り入れることがより良い見取りになると考える。

また、業務改善の意識に違いは少なく、『学び合い』授業実践者は、見取りと同様に人に注目し、人材活用に重視した特徴があった。『学び合い』以外授業実践者は、いくつかの項目に注目し、全体的に上位回答の割合は均等に高くなっていった。今回の調査では、どちらも必要だと考えている方向性は同じなのだが、ピンポイントで考えるか複数候補を挙げて考えるかの違いだけと思われるので、うまく融合できるのが最適ではないかと考えた。

ここで良い教育環境を考えてみると、以下のことが大切ではないかと結論に至った。

個人および全体研修等でいくつかの授業スタイルを理解し、お互いの良い所を学び入れ、多様な人と会話をして情報を共有することで、見取りの質を高めることができる。またお互いの理解が進み、お互いに手助けすることは業務改善にも繋がる。

多様な人と折り合いをつけて人と繋がるという考えは、個の資質・能力の向上だけでなく学校運営にも役立つのではないかと考えた。

今後の教育環境を良くするためにも、以上のことを意識して取り組んでいきたい。

#### 4. 4 今後の課題

今後の課題として、以下の4つが挙げられる。

- ・見取りの基準（観点）
- ・管理職との意識
- ・小中高の校務分掌の比較
- ・データ量の充実

共通した見取りの基準設定が必要であると考えた。もう一度先行研究を調べて分類から取り組みたい。より広い視野で考えてみるためにも、管理職との意識に違いはないか、また小中高の校務分掌を比較して共通・独自のものは何か整理することで、スクラップ・業務精選、および外部との連携・分担に必要なことを様々な視点で導き出すことができると考えた。また、より信頼度を高めるためにもデータ量の充実に取り組みたい。

### 引用及び参考文献

- (1) 文部科学省：「教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）」、pp.1-19, 2015,  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afiedfile/2015/12/11/1361110.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2015/12/11/1361110.pdf)
- (2) 文部科学省：「新たな未来を築くための大学教育の質的変換に向けて ～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）用語集」、p37, 2012,  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afiedfile/2012/10/04/1325048\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2012/10/04/1325048_3.pdf)
- (3) 西川純：「クラスが元気になる！『学び合い』スタートブック」、学陽書房、2010
- (4) 前掲(1) pp.19-21
- (5) 松友一雄：「国語科授業における教師の「見取り」とインターベンション ～効果的なインターベンションを生み出す即時的評価～」、国語教育研究、56号、pp.86-95、広島大学教育学部国語教育会、2015,  
[http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/3/39483/20160401094347277499/KokugoKyoikuKenkyu\\_56\\_86.pdf](http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/3/39483/20160401094347277499/KokugoKyoikuKenkyu_56_86.pdf)
- (6) 小川正人：「中教審「働き方改革」の論点と審議の見通し」、月刊教職研修10月号、pp.18-20、教育開発研究所、2017

- (7) 文部科学省：「教員勤務実態調査（平成28年度）の集計（速報値）について」，2017，  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2017/08/03/1297093\\_6.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2017/08/03/1297093_6.pdf)
- (8) 文部科学大臣松野博一：「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について（諮問）」，2017，  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2017/10/16/1397081\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/10/16/1397081_01.pdf)
- (9) 中央教育審議会：「学校における働き方改革に係る緊急提言」，2017，  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/siryo/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2017/09/01/1395044\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/siryo/__icsFiles/afieldfile/2017/09/01/1395044_2.pdf)
- (10) 文部科学省：「教育委員会における学校の業務改善のための取組状況調査の結果（速報値）及び学校現場における業務改善に係る取組の徹底について（通知）」，2017，  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/uneishien/detail/1387168.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/uneishien/detail/1387168.htm)
- (11) 学校管理職試験研修所：「教育法規超基礎講座／校務とは？」，  
<http://kyouikunohouritu.com/category1/entry102.html>
- (12) 西川純：「資質・能力を最大限に引き出す『学び合い』の手引き」，明治図書，2016
- (13) 中央教育審議会：「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」，p.24，2016，  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2016/02/05/1365657\\_00.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/02/05/1365657_00.pdf)
- (14) 文部科学省：「学校現場における業務改善のためのガイドライン～子供と向き合う時間の確保を目指して～」，2015，  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2017/04/05/1297093\\_4.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2017/04/05/1297093_4.pdf)

# A Study on Educational Environment in Teacher's Perspective and Consciousness of Business Improvement through "Learning Partnership"

– School organization, division of school affairs and improvement of its function –

Hiroshi OOTSUBO\* · Jun NISHIKAWA\*\*

## ABSTRACT

This research focuses on the good educational environment, the teacher's perspective and the consciousness of improvement of work, and those who are engaged in educational activities with the idea of "MANABIAI" (hereinafter referred to as 'learning class' practice) Compared with those who do not (hereinafter referred to as practicing lecturers other than "MANABIAI"), whether there is a difference in the consciousness of the planning and improvement of the work, in the case of the observation the teacher's perspective by the intervention Using the classification, analyzed and examined the division of school distinction from the viewpoint of consciousness of business improvement. As a result, in the survey, the "MANABIAI" class practitioners are excellent in understanding the communication situation of the learning group, and the class practitioners other than "MANABIAI" are excellent in grasping the learning situation of each learner Was revealed. Moreover, it was revealed that there is no difference in the direction aimed at improving business.

---

\* Shizuoka City Shimizu Okitsu Junior High School \*\* School Education